

デーリー東北

2022年(令和4年)5月13日(金曜日) (20)

移動型検体採取BOX開発

八工大、八戸平和病院など連携

八戸工業大などが開発した移動型の検体採取ボックス
 12日、八戸市



していた。

八工大は食品機械の設計や製作を行う大和エンジニアリング(八戸市)と協力し、約1年かけて開発。全長と高さは各約1・6メートル、幅は約1メートルで、重さは約100キロ。定員1人で検査スライフが外側から手を入れて検体を採取する。

点滴をつり下げるフックや、人工呼吸器のチューブを入れる穴も設けた。設計に携わった八

車いすのまま利用可能に

新型コロナウイルスのPCR検査で検体を採取する際に医療従事者の感染を防ぐため、八戸工業大は八戸平和病院や地元企業と連携し、移動型の「検体採取ボックス」を開発した。八工大などが既に開発していた据置き型のボックスを改良。内部に人が入った状態でも簡単に移動できるようになり、車いすの患者もそのまま利用可能とな

た。同病院では4月中旬から使用を開始し、検査の迅速化につながっているという。

同病院では、新型コロナウイルスに感染した可能性がある患者と一般患者の動線を分けるため、発熱外来を設けている。一方、通常診療で来院した際の検温で発熱が発覚するケースもあり、内部に患者が入った状態でも移動可能な機器の開発を八工大に依頼

工科大学部4年の駒井南海さん(22)は「病院向けの機器の設計は初めて。地域の医療に貢献できてとても光栄」と話した。同病院によると、既に約10人の検体採取に使用。佐藤正昭医師は「迅速に検査できるのでありがたい。移動型なので、近隣施設に出向いて検体採取もでき」と期待を込めた。

(里村静)

※この記事・写真等は、デーリー東北新聞社の承諾を得て転載しています。